

# サッカーラ 3505 号墓と雄牛頭部模型 —第1王朝期墓地研究への手がかりを求めて—

中野智章

Bull Heads of Tomb 3505: A Re-examination  
of the First Dynasty Cemetery at Saqqara

Tomoaki NAKANO

キーワード：国家形成、エジプト第1王朝、サッカーラ墓地、雄牛、連続凹壁

Key-words: state formation, Egyptian First Dynasty, Saqqara Cemetery, bull, palace façade

## はじめに—ケンプ説の波紋

英国のエジプト学者ケンプが *Antiquity* 誌と *Journal of Egyptian Archaeology* 誌にそれぞれ 1966 年と 67 年に発表した 2 本の論文は、古代エジプト文明の初源にあたる第 1 王朝（前 3000 ~ 2890 年頃）の王墓地が、上エジプトのアビュドスと下エジプトのサッカーラの 2 箇所に存在したとする当時の学界の定説に、大きな疑問を投げかけるものであった (Kemp 1966, 1967)。

アビュドスでは、19 世紀末に第 1 王朝の王名が彫られた墓碑が 6 基の墓と共に出土し、マネトの『エジプト史』にある、「第 1 王朝の王たちは（アビュドス近郊の）ティニスの出身である」との伝承にも合致していたことから、当時の王墓地であることがほぼ確実視されていた。しかし、1940-50 年代に行われたサッカーラの発掘調査により、状況は一変した。アビュドスの王墓は、サッカーラの墓よりもはるかに小規模であったことが判明したのである。またサッカーラからは、墓碑は出土しなかったものの、王名を記した封泥が多数出土したため、研究者たちはアビュドスを王の遺体を納めない「空」の王墓、一方のサッカーラを、遺体を納めた「真」の王墓と解釈した (近藤 1997)。双方の墓地は火災や盗掘の被害を受けており、遺体の有無については資料が乏しく<sup>1)</sup>、かつ後の王朝時代には、空の王墓を営む習慣が幾つか存在することがその主な理由であった。

しかし、ケンプはこの半ば強引とも言える解釈に疑問を呈し、新たな考え方を示してみせた。1920 年代の調査により、アビュドスでは王墓地から北東に 2km ほど離れた低位砂漠上に、長方形の空間を囲む小型墓の列が 2 箇所存在することが既に知られていた (Ayrton et al. 1904)。出土した土器から第 1 王朝期に属することが明らかなこの遺構を、ケンプは第 3 王朝のジョセル王が建造したとされる階段ピラミッド複合体の周壁に似た構造物と捉え、元来王の

葬祭を司る場所「葬祭周壁 (funerary enclosure)」であつたとし、墓と一体になることで王墓複合体を形成していたとの新説を発表したのである。よって、墓と周壁を合わせたアビュドスの王墓複合体はサッカーラの墓の規模を圧倒的に上回ることとなり、王墓地は墓碑が出土したアビュドスにのみ存在したと結論づけた。一方サッカーラ墓地に関しては、第 1 王朝の末期に建造され、最も規模の大きい 3505 号墓を例に採り、サッカーラで唯一出土した墓碑とその設置場所の検討から、被葬者は墓碑に名が彫られた高官メルカの可能性が高い点を指摘し、サッカーラに埋葬されたのは王ではなく、高官や王族であったとの考えを述べた。

このケンプの新説は、アメリカやイギリス、ドイツなど、多くの国の学者の賛同を得るところとなった。また 1970 年代から 90 年代に掛けてドイツ隊が行った調査により、第 1 王朝以前の先王朝時代末期の首長層を埋葬した墓地がアビュドスで発見されたことも相まって (Dreyer 1998)、今日ではアビュドス王墓・サッカーラ高官墓説が学界の大勢を占めるに至っている。しかし、フランスやエジプト等の研究者の中には依然異議を唱える者も多く、論争の決着がついたとは見なされていない。その背景には、首都メンフィスに隣接し、階段ピラミッドを始めとする数々のピラミッドが建てられたサッカーラに、王の葬祭施設が全く存在しなかったと断言できるのか、また、第 2 王朝の王墓は後半のペルイプセン王とカセケムイ王を除き全てサッカーラに築かれたとされるものの、アビュドスからサッカーラになぜ王墓地が移動したのかは未だ明らかでない、などといった幾つかの大きな疑問があると思われる。

よってこの問題の真相は、首都メンフィスの調査が厚い堆積層に阻まれ困難なこともあるて依然明らかでなく、3000 年にわたる古代エジプト国家の形成過程に関しては、学界の見方が大きく二分される結果となってしまってい

る。その見方とは、

- 1) 王たちは首都を下エジプトのメンフィスに築いたものの、出身地である上エジプトのティニスは拠点として依然重要で、王墓は近郊のアビュドスに築いた。しかし、第2王朝に入るとメンフィスの重要性が増したため、王墓もサッカーラに移し、そこから本格的に中央集権化を進めたとする「アビュドス王墓・サッカーラ高官墓説」(Wilkinson 1999)
- 2) 王たちはアビュドスに空の王墓を築く一方、首都メンフィスを見下ろすサッカーラに遺体を納める王墓を第1王朝の当初から築き、中央集権化は第1王朝の開始当初からメンフィスを中心に全土的に進められていたと見る「アビュドス空の王墓・サッカーラ真の王墓説」(Grimal 1992)

の2つである。

このように、王墓の所在に関してどちらの説を採るかという問題は、古代エジプト文明の成立を考える上で、その根本部分に関わる重要な論点となっている。また一方では、古王国時代に隆盛を極めるピラミッドの意味や役割を探る上で、王が2つの王墓を有するいわゆる「両墓制」が王朝開始当初の段階で存在したかどうかも、大きな注目を集めていると言えよう。

そこで本稿では、この第1王朝の王墓地論争を巻き起こしたケンブ説のうち、その有力な論拠となったサッカーラ墓地最大の3505号墓に関する議論を取り上げる。一連の論争を複雑にした原因の一つは、ケンブがサッカーラ墓地全体の被葬者像をこの墓の検討のみでほぼ規定してしまった点にあると筆者は考えているが、以下では、墓や周壁といった葬祭建造物の規模に偏重してきた議論を離れ<sup>2)</sup>、アビュドスにはないサッカーラ独特の特徴である、墓の外周に設置された雄牛頭部の模型を検討することで新たな研究の方向を見出してみたい。

### 3505号墓の概要

第1王朝期のサッカーラ墓地は、古代エジプト最初の都メンフィスを見下ろす海拔50m程度の石灰岩台地の縁辺に沿って、ほぼ南北に造営されている(図1)。そのうち、ここで取り上げる3505号墓は、最も古いアハ王期に建造された3357号墓より南側に築かれ、ジェト王期の3504号墓とデン王期の3506号墓の間に位置している。エメリーは1954-56年にこの墓の発掘を行い、報告は1958年にロンドンで出版された(Emery 1958)。

墓全体の規模は65×37mで、二重の日乾燥瓦壁に囲まれた内側に同じく日乾燥瓦造りのマスタバと付属施設が築かれている(図2)。マスタバは、地上に「王宮ファサード」と呼ばれる連続凹壁で構成された外壁を有する規模

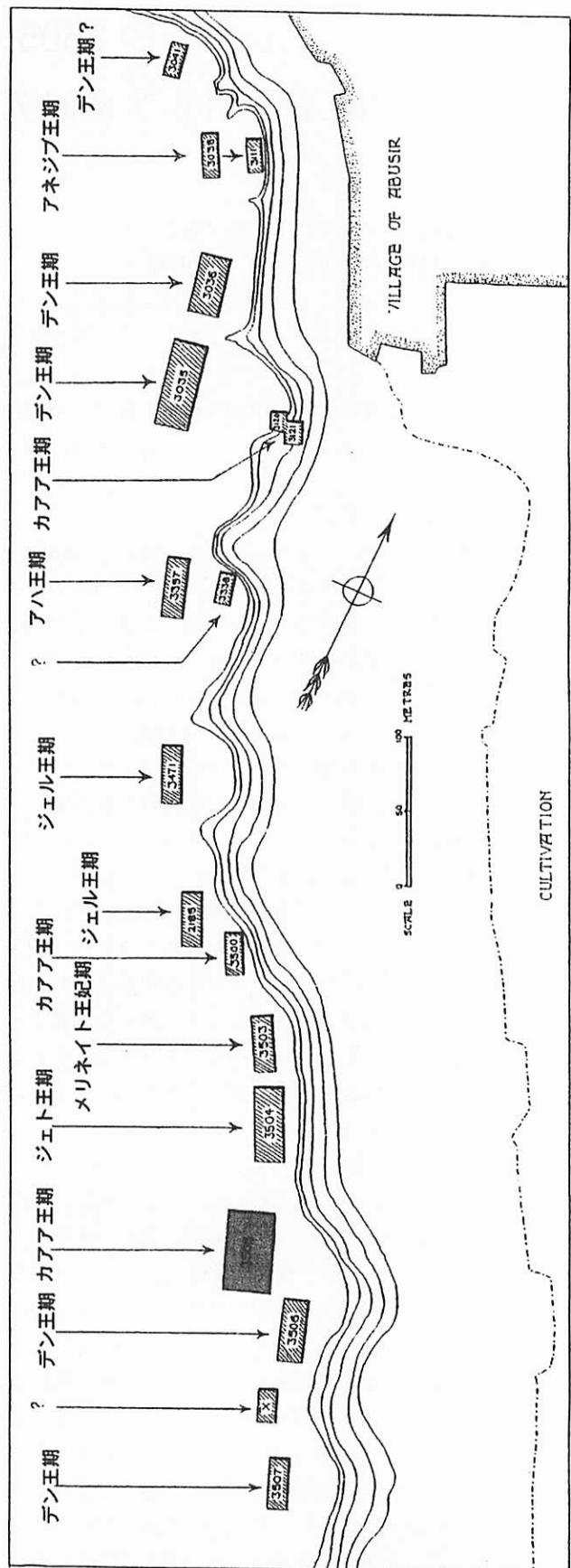


図1 サッカーラ第1王朝墓地の全体図  
(Emery 1958: Pl. 1)

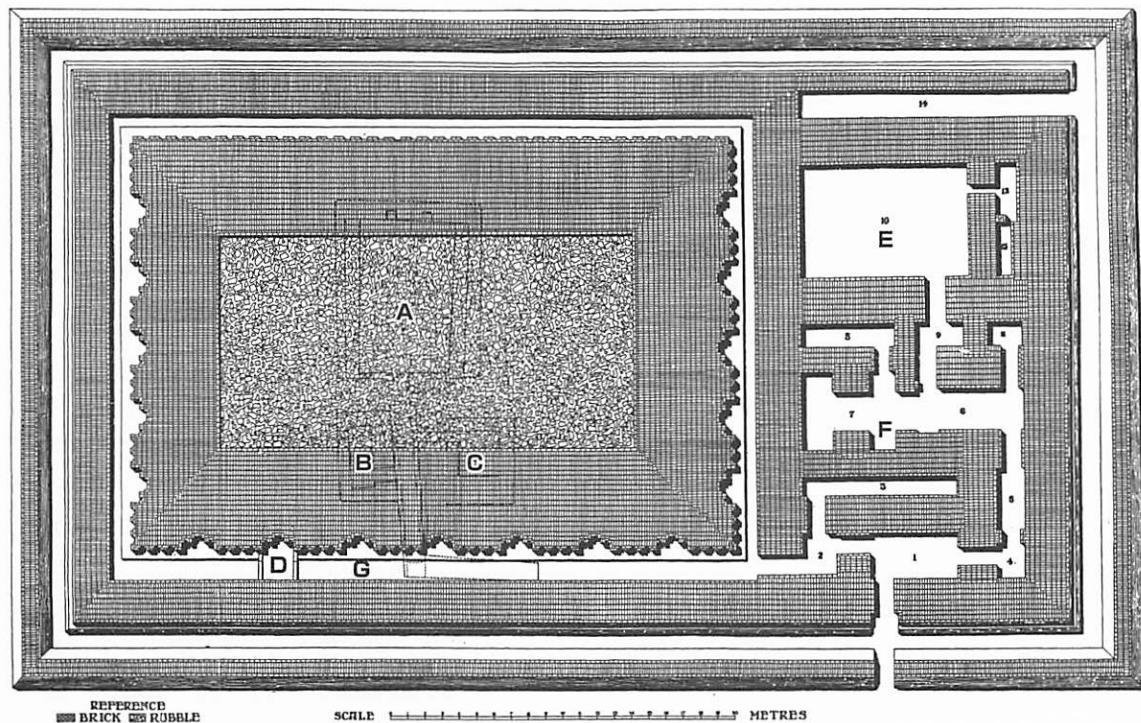


図2 サッカーラ 3505 号墓のプラン (Emery 1958: Pl.2)

35.20 × 24.30m の上部構造、地下に玄室（A）と 2 つの副室（B, C）の計 3 部屋からなる下部構造を有している。上部構造には石や土砂が詰められているのみで、部屋は存在しない。ただし、東側面では南東隅から 2 点目の壁龕下に深さ約 2m、幅約 3 × 2m の豊坑が発見され、壮年男性の骨が出土したことから、エメリはこれを付属墓（D）と解釈した。

一方、マスタバの北側に位置する付属施設へは、上部構造の北東隅から伸びる幅 1m ほどの細長い通路で通じている。施設には、迷路のように入り組んだ 10 ほどの部屋状の空間が設けられ、中でも西奥にある 5 × 4m 程の最大空間（E）には、凝灰岩が床面に敷かれ、壁には黒や黄色などの塗料の跡が付着していた。また、その手前の空間（F）では脚部が残る木像の台座が 2 体並んだ形で出土し、エメリは被葬者を祀った葬祭殿（funerary temple）と考えた。

遺物は、盗掘や火災の影響で家具や小型の遊具用品はわずかに断片が出土したのみだが、他にフリント石器 78 点、土器 460 点、石製容器 938 点が出土している。また本体東側面の脇、南東隅から 3 箇所目の壁龕前にあたる通路上（G）では、縦 173cm、最大幅 54cm、最大厚 24cm の石灰岩製墓碑が南向きに仰向けになった形で発見された。この墓碑には、陽刻で高官と考えられる人物が椅子に腰掛け杖を手にした形で彫られており、共に記された象形文字から、高官メルカの碑であることが判明している。そこでエメリ

は、この墓碑を先述した付属墓に付随するものと考え、そのような高位の人物を付属墓に埋葬できるのは王以外に有り得ないとし、墓の被葬者を、多くの封泥に名前が記されている第 1 王朝末のカアア王に比定した。なお、この墓の上部に堆積していた土砂からは、後世の神殿や墓などに刻まれた歴代の王名表には名前が見られない、スネフェルカという王名を刻んだ石製容器の断片が 1 点出土したが、その意味は不明である。

#### ケンブ説の問題点と分析の方法

このエメリの報告に対し、ケンブが示した新解釈は次のようなものであった。この墓で発見された石碑は、付属墓から 3m しか離れていない位置で出土したことや、縁を一段低く彫り下げ、底部も先を尖らせて全体的に壁にはめ込む形を呈していることなどから、エメリの主張するように、すぐそばの付属墓とされる墓壙上の壁龕にはめ込まれていた可能性が高い。しかし、その壁龕の位置に注目すると、それは後の古王国時代に墓参者が被葬者を弔うため土器等を用いて供献を行った場所、すなわち、本体東側面の南から 2 番目の壁龕に当たる。そこでケンブは、壁龕にはめ込まれた石碑は付属墓ではなく、墓本体の被葬者に対するものであったとし、3505 号墓は王ではなく、高官メルカを埋葬した墓と結論づけた。また石碑と同様に第 1 王朝期のサッカーラ墓地で唯一出土した葬祭殿と考えられる遺構（F）についても、同様の遺構を有し、第 2 王朝後半

と考えられるサッカーラ 2407 号墓の例などを引き合いに出し、死者の魂が宿ると考えた彫像を設置し、墓参時に供養を行う施設の先駆け的存在であるとした。

このように、ケンプ説は 3505 号墓に見られる付属墓や葬祭殿を古王国時代における墓での祭祀と結びつけ、新たな解釈を示したものであった。しかし、この 3505 号墓は唯一の石碑や葬祭殿を持つことからも分かるように、第 1 王朝期の墓地全体から見れば他の墓には見られない独特の特徴を有しており、その墓をもって墓地の被葬者像全体を比定してしまった経緯には、大きな危険を孕んでいたことも事実である。また、3505 号墓自体に関してみても、重要と考えられる次の 2 点の特徴に関する分析がなされていない。

まず第 1 に、供養を重視する個人墓への発展上に位置づけた葬祭殿とされる遺構からは、2 体の木像が並んだ形で出土したものの、その 2 体の意味についてケンプはふれていない。そして第 2 に、地上にある墓の上部構造には外面に色とりどりの幾何学文様が描かれ、周囲を巡るベンチ状の構築物にも本物の角をあしらった泥でできた白色の雄牛頭部模型が置かれていたが、その意味や役割も不明である。

このうち、墓に像を設置し文様を描くといった行為は古王国時代の貴族を埋葬したマスタバに類例が多く存在するため、ケンプが特に像が 2 体置かれる意味について論じなかった点も理解できよう。しかし泥で造った雄牛頭部の模型は、古王国時代はもとより、サッカーラと同じ連続凹壁を持つ同時期のアビュドスの葬祭周壁でも発見されていない (O'Connor 1989: 74-75)。

この模型は、第 1 王朝期のサッカーラ墓地において 3505 号墓以外に 3504 号墓と 3507 号墓の 2 基で確認されているほか、3506 号墓でも角が数点出土し、調査者のエメリーがその存在を示唆している。中でも 3504 号墓は出土状態がとりわけ良好で、300 点もの模型が墓の周囲に置かれていた (Emery 1954: 9)<sup>3)</sup>。白色の雄牛頭部模型と多色の幾何学文様で飾られたサッカーラの墓は、マウンドのみで地上部が構成されたと考えられているアビュドスの墓と外観的に大きく異なっていたと言えよう。だとすれば、遺体を納めたか否かについては意見が分かれるものの、墓碑の出土から王墓地であることが確実視されるアビュドスには見られない、このサッカーラ独自の特徴を論じることが、3505 号墓の意味や第 1 王朝期のサッカーラ墓地について新たな知見を得る、1 つの手掛かりとなるのではないだろうか。そこで以下では、雄牛頭部の模型に焦点を絞り、それがサッカーラで採用された背景を探ってみたい。

#### 雄牛頭部模型の実際

第 1 王朝期のサッカーラ墓地において雄牛頭部の模型を

出土した墓は、全 20 基弱の墓のうち 3504 号墓、3505 号墓、3506 号墓（角の出土による推定）、3507 号墓の計 4 基である。以下にデータを示し、特徴を分析する（表 1、図 3）。なおここでは、墓の外面を構成する連続凹壁のうち、大きさの異なる大型・小型の凹みをそれぞれ主壁龕・副壁龕と呼称する。

#### 3504 号墓出土例（図 3-1, 2）

泥で頭部を象り、雄牛の角を 2 本装着する。頭部は逆三角形で、2 点の木材を軸としてベンチに固定される。上部構造の周囲を二重に囲む模型には大型・小型の 2 種類があり、主壁龕の直前では小型模型 2 点の間に大型模型を 1 点、その手前では、大型模型 2 点の間に小型模型 1 点を置く（図 3-2）。スケール入りの写真図版（図 3-1）によると、大型・小型模型とも鼻の部分は幅が 15cm 程度なのに対し、頭頂部の幅は大型で 35cm、小型で 20cm 程度。頭頂部から鼻先までの長さは大型で 35cm、小型で 20cm 程度である。角の形状は大型が S 字状に緩やかな曲線を描くのに対し、小型は緩やかに内湾する。模型の多くは破壊を受けているが、痕跡は多数出土しており、計 300 点以上が置かれたと考えられる。中には青や赤色の塗料が付着したものも見られ、調査者のエメリーは、壁龕に塗られた色が飛んだ可能性を示唆している。

#### 3506 号墓出土例

外壁と本体との間にある通路部分から雄牛の角が数点出土。エメリーはベンチに置かれた模型に装着されたとするが、詳細な記述や写真は存在しない。

#### 3507 号墓出土例（図 3-3）

泥で頭部を象り、雄牛の角を 2 本装着する。連続する 3 箇所の副壁龕のうち、中央の副壁龕前に配置される。多くが破壊を受けているが、主壁龕の前には置かれない。写真図版では、緩やかに内湾する角を有する。模型は頭部が逆三角形を呈しており、角が外れたものが多い。

#### 3505 号墓出土例（図 3-4）

泥で頭部を象り、雄牛の角を 2 本装着する。エメリーは数百点の模型の存在を示唆しているが、実際の出土例は数例に過ぎない。墓の東側面を示した写真図版では、3 箇所連続した副壁龕の一番北側にある凸壁前、そしてベンチの北東隅にそれぞれ模型の痕跡が見える。頭部は逆三角形で、角は緩やかに内湾する。

いずれの例も泥で頭部を形作り、実物の角を装着する点は同様である。ただし、模型の大きさは墓によって異なる。3504 号墓では、大小 2 種類の模型が墓の周囲に前後二列に置かれていた。配置は一定の規則に従っており、壁龕の奥では小型模型 2 点の間に大型模型を 1 点、その手前では

表1 雄牛頭部の模型を有する墓の壁龕詳細

項目 墓	上部構造 の規模	主壁龕数	主壁龕の 構造	主壁龕間の 副壁龕数	副壁龕の 構造	ベンチの 構造
3504	56.45×25.45m	長辺 11 短辺 4	最大幅 2.00m 最大奥行 1.10m	3	最大幅 0.45m 最大奥行 0.25m	幅 0.60m 高さ 0.45m
3506	47.60×19.60m	長辺 13 短辺 5	最大幅 1.75m 最大奥行 1.05m	3	最大幅 0.50m 最大奥行 0.20m	幅 0.25m 高さ 0.23m
3507	37.90×15.85m	長辺 8 短辺 3	最大幅 1.90m 最大奥行 0.80m	3	最大幅 0.50m 最大奥行 0.30m	幅 0.45m 高さ 0.25m
3505	35.20×24.30m	長辺 7 短辺 5 (西面のみ小型の壁龕が連続)	最大幅 1.70-1.93m 最大奥行 0.75-0.83m	3 (長辺) 2 (短辺)	最大幅 0.35-0.39m 最大奥行 0.25-0.28m (西面: 幅 0.35m 奥行 0.12m 壁龕幅 0.64m) <sup>4)</sup>	幅 0.55m・ 高さ 0.30m

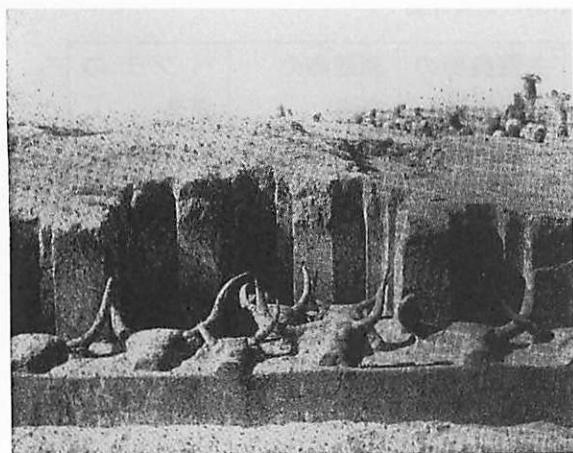
大型模型 2 点の間に小型模型を 1 点配している。これに対し、3507 号墓は副壁龕の前に 1 点模型が置かれるのみで主壁龕の前には何も置かれず、二列に模型が並べられることもない。ただし、3505 号墓は壁龕の手前と奥の双方に模型の痕跡が見られるため、エメリーが述べているように墓の周囲を二列の模型が囲んでいた可能性があろう。

また、装着される雄牛の角にも違いがあり、3507 号墓と 3505 号墓では緩やかに内湾する形のものを用いるものの、3504 号墓ではそれは小型模型に限られ、大型模型にはより大型の、S 字状に曲がった角が装着される。ナイル川上流域に居住するヌア一族では、牛の角を人工的に変形する事例が見られ、フランクフォートもかつてエジプトでの風習の可能性について論じたことがあるが (Frankfort 1948: 162-168)、3504 号墓におけるこの角の違いが何を表しているのかは現段階では不明である<sup>5)</sup>。

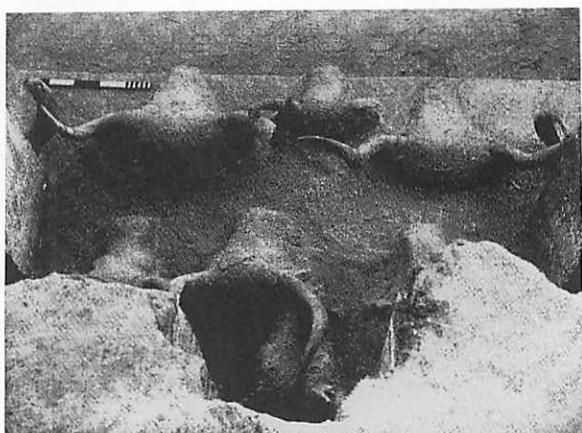
次に、模型が設置されたベンチについてみると、幅や高さは様々である。300 点もの模型が置かれたとされる 3504 号墓は、幅 0.60m、高さ 0.45m と他の 3 基の墓より数値が

大きい。模型の頭頂部から鼻先までの長さは大型が 35cm、小型が 20cm 程度で、頭頂部から後方へ向けて広がる角の長さを考慮すると、縦方向の長さは約 60 ~ 70cm と推測される。よって上述した規則に従って模型を二列にした場合、ベンチ部分から奥へ窪んだ壁龕の奥行を加えても、実際にはあまり余裕のない、かなり込み入った形で模型が配置されていた様子が分かる。その点、3505 号墓は幅が 0.55m と 3504 号墓に近く、数値からも模型が二列に置かれていた可能性を想定できる。一方、3507 号墓は幅が 0.45m と若干狭く、二列に模型が置かれた可能性は低い。さらに、3506 号墓に至っては幅が 25cm しかなく、模型そのものが置かれていた可能性についても疑問が残る。

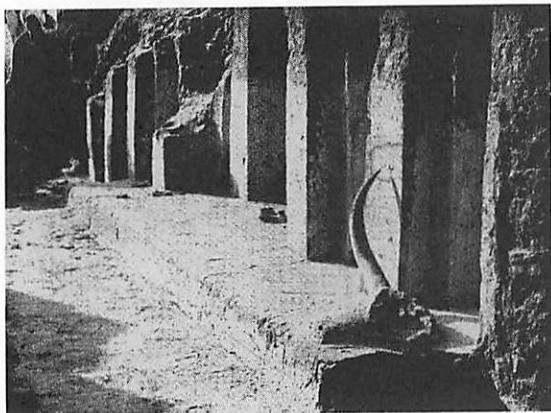
またベンチが接する壁龕部に着目すると、3506 号墓は主壁龕を長辺に 13 箇所、短辺に 5 箇所設けており、他の 3504 号墓、3507 号墓、3505 号墓より数が多い。ただし、上部構造の規模は 3506 号墓 (37.90 × 15.85m) より 3504 号墓 (56.45 × 25.45m) が大きく、上部構造の規模に比例して主壁龕の数が増える訳ではない。なお、壁龕の規模は



1. 3504号墓東面雄牛頭部模型出土状況



2. 3504号墓東面雄牛頭部模型出土状況（上部から）



3. 3507号墓東面雄牛頭部模型出土状況



4. 3505号墓東面雄牛頭部模型出土状況（トーン部分）

### 図3 雄牛頭部模型の出土状況

1・2 3504号墓 (Emery 1954: Pl. VII-a & b)、3 3507号墓 (Emery 1958: Pl. 90-b)、4 3505号墓 (Emery 1958: Pl. 13-a)

墓によって異なり、3506号墓では主壁龕の最大幅が1.75m、最大奥行が1.05mであるのに対して、300点もの模型が置かれたとされる3504号墓は最大幅が2.00m、最大奥行が1.10mと幅が若干広い。ただし、最大幅は3507号墓で1.90m、3505号墓でも1.70～1.93mと大きな違いはなく、むしろ最大奥行は3507号墓と3505号墓でそれぞれ0.80m、0.75～0.83mと、3504号墓や3506号墓に比べ若干浅い。

一方、副壁龕に主壁龕などのヴァリエーションは認められない。主壁龕2箇所の間に副壁龕3箇所を配する形は4基の墓とも同様で、最大幅も0.35mから0.50m、最大奥行も0.20mから0.30mと数値の差もわずかである。なお、3505号墓は西面が幅0.35m、奥行0.12mの副壁龕のみで構成されるほか、四隅の主壁龕も、他の部分と異なり3箇所が連続する形を呈している。よって、壁龕に関して言えば副壁龕よりも主壁龕に墓による個体差が大きいと見ることができよう。

なお、模型はどの墓でも白色漆喰が施されており、これは設置場所のベンチと一括して塗られたものであることが出土状況から判明している (Emery 1954: 9; 1958: 8, 41)。また3504号墓と3507号墓、3505号墓の3基では、模型の背景に当たる壁龕に様々な色が塗られていた。

順に述べると、3504号墓は主壁龕が赤で塗られているものの、他の色がどのように用いられたかは不明である。模型には青色が散見されるため、エメリーは壁龕の色が飛んだ可能性を示唆しているが、壁龕自体に青色は見られないようである (Emery 1954: 9)。

3507号墓は上部構造の保存状態が良く、外面には2cmの泥漆喰上に白色の漆喰が塗られていた。主壁龕は赤、他の部分は黄色で塗られている。東面は2.40mの高さを持つ天井部が残存しており、うち床面から天井の丸太までの高さは1.50m、壁龕全体の高さは1.72mであったことが判っている。

そして3505号墓では、上部構造の外面がベンチまで続

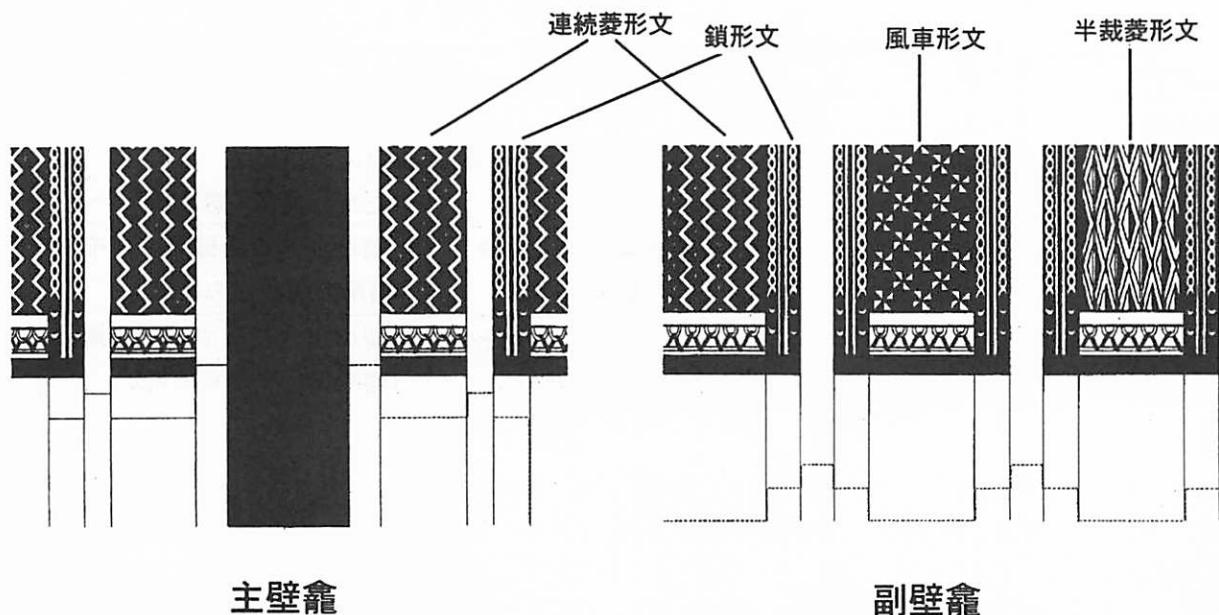


図4 サッカーラ 3505号墓の壁龕文様 (Emery 1958: Pl. 6)

く厚い泥漆喰で覆われ、その上に白色漆喰が施されていた。主壁龕の中央は赤色、周囲には黄色地に赤・白・黒・青色を使って文様が描かれている。文様の下方には、5本の紐で壁に掛けたマットが黄色と赤色で描かれており、これは日干煉瓦建築以前の小屋に掛けられていた、革製マットの文様を示すとされる。文様は4種類で（図4）、主壁龕には二重波線間の菱形内に点を打つ「連続菱形文」が描かれるのみだが、副壁龕では、「連続菱形文」の他に風車状の文様を記した「風車形文」と、菱形を縦に半裁した「半裁菱形文」が記される。また各文様の両縁には、鎖状の装飾下に、竹の節状の図柄を持つ「鎖形文」も描かれている。なお、この墓では西壁のみが他と異なり、幅の狭い凹壁が連続しているが、用いられる文様は副壁龕と同一である。ただし「連続菱形文」の方向は縦から横へ、また菱形の色も青から赤へと変化している点が興味深い。

#### 模型が持つ意味

以上のデータからは、第1王朝期のサッカーラ墓地に見られる雄牛頭部模型について、次の3点を知ることができよう。すなわち、

- 1) 頭部の形態は一様だが、サイズは墓により個体差があること
  - 2) 3504号墓の出土例に見られるように、角には少なくとも2種類の形状があること
  - 3) 模型が置かれた壁龕に、上部構造の規模に比例した数の増減や幅の大小は見られず、模型のサイズはむしろ設置されたベンチの幅に制約される面が大きい
- の3点である。それでは、なぜ一部の墓にのみこうした模

型が設置されたのだろうか。その理由を考えてみたい。

まず注目されるのは、墓地で最も早いアハ王期に建造された3357号墓を起点として考えた場合、模型を有する墓（3506号墓については推定）はすべてその南側に建造されていることである。しかもそれら3504号墓・3506号墓・3507号墓・3505号墓は、建造された時期は異なるものの互いに近接している。

この点を墓地が形成された過程に即して考えてみると、第1王朝期のサッカーラ墓地では3357号墓を始めとしてジェル王期の3471号墓、ジェト王期の3504号墓など、当初墓は崖の縁辺に沿って南側へと展開した。しかし第1王朝半ばのデン王期には、3506号墓や3507号墓が引き続き南側に造られる一方で、3357号墓の北側にも3035号墓や3036号墓が登場し、続くアネジブ王期の3038号墓や3111号墓はその北側に築かれている。そして末期のカアア王期には、北側ではなく、南側の既存の墓の間に残る空閑地に3505号墓や3500号墓が造られたのである。

ここで大型・小型の2種類から成り、数量も300点と圧倒的な模型量を誇る3504号墓は、これら4基の墓の中で最古のジェト王期に属している。ただし、続くデン王期の3507号墓では、模型は3箇所並んだ副壁龕の中央にしか置かれず、サイズも小型で、角の形状も出土したもので見る限り内湾型のみに過ぎない（図3-3）。また同時期の3506号墓は、角が数点出土したものの模型の存在は確認されていない。そして王朝末のカアア王期に築かれた3505号墓では、墓の東側面を示した写真図版から（図3-4）、3箇所連続する副壁龕の一一番北側の凸壁前、及びベンチの北東隅に模型の痕跡を確認することができる。この2点の

表2 墓別の雄牛頭部模型の数量

墓番号	王期	模型の数	証拠
3504	ジェト	多い(300点以上)	多数の模型出土
3506	デン	なし or 少ない	数点の角が出土 (ただし模型の痕跡無)
3507	デン	少ない(副壁龕3点につき1箇所とすると最大26点)	3箇所並んだ副壁龕の、中央 1箇所の前からのみ出土
3505	カアア	多い?(二列に置かれたと考 えると3504号墓に類似)	模型の出土位置や壁龕の構造 (幅や奥行)からの推定

模型の出土位置は、3507号墓のように3箇所並んだ副壁龕の中央、あるいは主壁龕の前、といった規則的に模型を設置する場所とは異なっているため、実際にはその間を埋める形でさらに多くの模型が存在した可能性が高い<sup>6)</sup>。よって墓の建造時期と模型の数との関係に注目すると、表2のようにまとめることができる。

各墓の損壊程度の差もあって具体的な点数までは不明だが、この表からはジェト王期に大量の模型が3504号墓に設置されたものの続くデン王期では数が減少し、カアア王期に再び多くの模型が3505号墓に置かれたことを示している。では、このように墓地の南半分に集中するこれら4基の模型を持った墓の中で、模型の数量が時間の経過に応じた単純な減少、あるいは増加の傾向を示さない、といった状況はいったい何を示しているのだろうか。

この疑問を解く1つの鍵は、多くの模型を持つ3504号墓の調査報告から得ることができるようと思われる。発掘者であるエメリーは、王名が記された封泥の出土から、墓が建造後火災に遭い、その後第1王朝末のカアア王期に改装されたとの見方を示しており(Emery 1954: 6-8)、地下の下部構造では焼けた玄室の壁を1.2m厚の新たな壁で補強した上で小部屋を2つ設け、地上の上部構造では、損傷を受けた壁を補修した上に漆喰を塗り、控え壁を築いた形跡を認めることができると述べている。

よって、一連の改装はかなり大がかりなものであったと推測されるが、ここで考えてみたいのは、多数の雄牛頭部模型の設置もその際に行われた可能性はないのか、という点であろう。前節で検討したように、この3504号墓に見られる300点もの模型は空間的にかなり込み入った形で配置されているが、地上部分だけでなく地下にまで及んだ大改装を、そうした模型が敷き詰められたベンチを破壊せずに成し得たとは考えにくく、事実、ベンチの仕上げに関してエメリーは、墓本体とベンチを白色の漆喰で上塗りした跡が見られると記している(Emery 1958: 8)。

また、カアア王期より前に築かれた3504号墓以外の墓

で、模型を持つことが確実な例は3507号墓のみだが、ここでも、カアア王の名は東面の南側から2箇所目の主壁龕で出土した封泥に見出すことができる(Emery 1958: 97)。この墓は、火災の被害を受けておらず後の改装も確認されていないため、エメリーはその封泥を混入の疑いが強いと記したが(Emery 1958: 95)、模型がカアア王期に追加されたものであったとすれば、その際に、カアア王の封泥をつけた土器が壁龕前に供養の品として置かれた可能性も考えられよう<sup>7)</sup>。

さらには、サッカーラの墓に用いられたのと同様の連続凹壁はアビュドスのジェル王期に属する葬祭周壁にも存在し、ベンチも周壁の台座部分に付属するものの、そこに模型が置かれた形跡は、オコナーによる近年の調査でも確認されていない(O'Connor 1989: 74-75)。ただし、この周壁は北東の壁のみが副壁龕3箇所と主壁龕1箇所の連続で構成されるのに対し、他の北西・南西・南東の壁は単純な副壁龕の連続で形作られている<sup>8)</sup>。アビュドスとサッカーラの墓は地下の下部構造が類似するなど、両地の葬祭建築は様式的に深い関係にあったと考えられているが(Wood 1987)、王朝前半のジェト王期から3504号墓にこの雄牛頭部模型が存在したとすれば、アビュドスにそれが見られても良いように思われる。それが確認されないことも、模型がカアア王期に新しく付加されたものであったことを示唆しているのではないだろうか。

では、雄牛頭部の模型がカアア王期に設置されたとすれば、そこにはどのような意味が込められていたのだろうか。一般に、牛は王朝時代全般を通じて墓壁や碑に描かれたことでも知られ、犁耕時の重要な労働力、あるいは一般庶民が通常は口にすることのできない最も高価な食料と見なされていた。また、硬貨や紙幣が存在しなかった当時においては富裕さを表すシンボルでもあり、それを3504号墓のように300点もの模型を備えつけることができたとすれば、その設置者は財力のみならず、それを実行するだけの権力を持った人物であったと言えよう。

そして雄牛は、王権と強いつながりを有する動物でもあった。先王朝時代末期の最重要資料として知られる蟻王の棍棒頭では、王のキルトに雄牛の尾が付けられ (Petrie and Quibell 1900)、国家統一時の様子を示すナルメル王のパレットには、王を象徴する図像として雄牛が敵の町を攻撃する場面が描かれている (Green and Quibell 1902)。また、同時期における下エジプトの中心地ブトでは、雄牛を飼育していたと考えられる囲いやそれに関する遺物が出土しており (von der Way 1989: 284, Fig. 7.b)、アビュドス出土の象牙製ラベルにも、ブトのジェバウト神殿と雄牛が彫られている (Petrie 1901: 21, Pl. IIIA-5, X-2)。また、歴代の王の活動を記録したパレルモ石からは (Wilkinson 2000)、第1王朝の王たちが「アピス（首都メンフィスで崇拜された雄牛）の疾走」と呼ばれる儀礼を行っていたことも明らかである。

最後に、模型の背景に当たる壁龕に描かれた壁画は、3504号墓・3507号墓・3505号墓の各墓から模型と共に出土している<sup>9)</sup>。先に示したように、模型が置かれたベンチと連続凹壁から成る壁龕は、共に同じ白色漆喰で一度に塗られているため、模型がカアア王期に追加されたとすれば、壁画もその際に描かれた可能性が高い。中でも、3505号墓に描かれた連続菱形文は元々アビュドスに起源を持ち、王朝時代を通じて王家の紋章的存在として用いられた可能性が高い点を王像等の資料から別に確認しているため (Nakano 2000; 中野 2003a)、上述した雄牛の意味を含めると、雄牛模型と幾何学文様を擁した墓の外観は、まさに王権を象徴する意匠であったと見ることができる。しかし、遺体を納めたか否かは別として、墓碑の存在から王墓であることが確実なアビュドスの墓や葬祭周壁にこの模型や文様は確認されていない。それはどのような理由によるのだろうか。

#### おわりに

第1王朝期のサッカーラ墓地に特徴的な雄牛頭部の模型を様々な観点から検討してみると、それらは初期のジェト王期から存在したのではなく、王朝末期のカアア王期に新たに追加されたものであった可能性を見出すことができる<sup>10)</sup>。また、雄牛は王権を象徴する存在でもあり、3505号墓では、アビュドスの王が独占的に用いてきたと考えられる連続菱形文と共に、王権を示すシンボル的存在として墓の外面に設置されたと推察される。以上が、分析の結果得られた新たな知見である。そこで最後に、本稿での議論の出発点とした3505号墓の意味をその知見を加えて捉え直し、ひいては、第1王朝期のサッカーラ墓地研究についてどのような研究の方向を考えることができるかを記して結びとしたい。

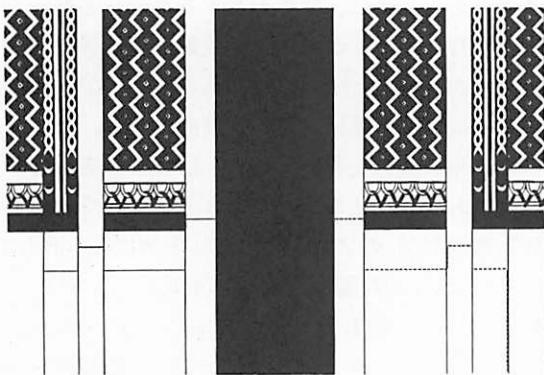
まず言えることは、模型を有する墓から名前入りの封泥が出土したカアア王が、一連の改装や建築等に関わっていた可能性が高い、ということであろう。中でも雄牛頭部の模型の他に精緻な幾何学文様を壁龕に描き、サッカーラ唯一の墓碑や葬祭殿を持った3505号墓は、墓地内でも傑出した墓であったと見ることができる。そこで問題となるのは被葬者像だが、カアア王はアビュドスに墓を有しており、3505号墓からは大型木棺の痕跡や被葬者と見られる壯年男性の人骨の一部も発見されているため (Emery 1958: 12, 44-45, Pl. 26)、カアア王自身がこの墓の被葬者であったと見ることは困難である。

しかしながら、上述したようにこの墓に描かれた幾何学文様のうち、最大の範囲を占める連続菱形文は本来アビュドスの王のみが持ち得た可能性が高く、ある意味では、アビュドスに代表される上エジプトを示した文様とも捉えることができる。そのように考えると、逆に雄牛は聖牛アピスとして首都メンフィスに深い関連を持つことから、下エジプトを表した意匠と見ることもできよう。だとすれば、幾何学文様と雄牛頭部模型の双方でエジプト全土の統一を表したと、捉えることも可能なのではないだろうか。

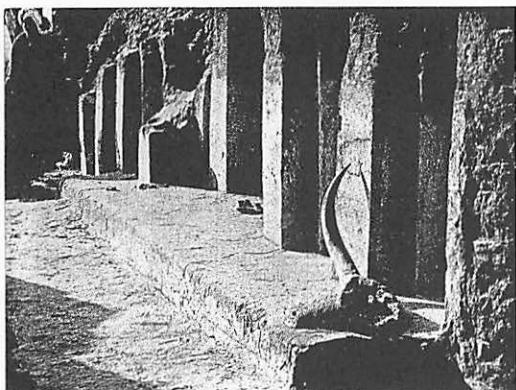
この推察が正しければ、同じ3505号墓から出土したサッカーラ唯一の葬祭殿と、そこに置かれていた2体の木像に関しても、次のように解釈することができよう。すなわち、文様や模型が王権に深く関連したものであるように、像も王を表現したものであった可能性が高い、ということである。その点において参考となるのは、エジプト中部のリシトから出土した、中王国時代第12王朝のセンウスレトI世の2体の木像であろう (Smith 1998: 97, Fig. 171)<sup>11)</sup>。この像は、1体ずつが上下エジプトそれぞれの王冠を被った姿で表現されているが、これが3505号墓の2体の木像にも当てはまるとすれば、3505号墓は、上下エジプトの統一を今述べた外面の模型や文様だけでなく、葬祭殿の2体の王像でも示していたことになる (図5)<sup>12)</sup>。

したがってその点から見ても、この墓の被葬者はカアア王ではないにしろ、王か王に匹敵する権力を有した人物であったと捉えるのが妥当であろう。そこで注目されるのは、冒頭で述べた石製容器片にある、スネフェルカという後の時代の王名表には登場しない王である。このスネフェルカは、王名を記す際のセレクと呼ばれる長方形の枠に名前が記されており、その名は同じサッカーラの階段ピラミッド (第3王朝) 下のギャラリーからも出土しているもの (Lacau and Lauer 1959: 15, pl. 17-no. 86)、後世の記録では王名表に名前が記されていない。

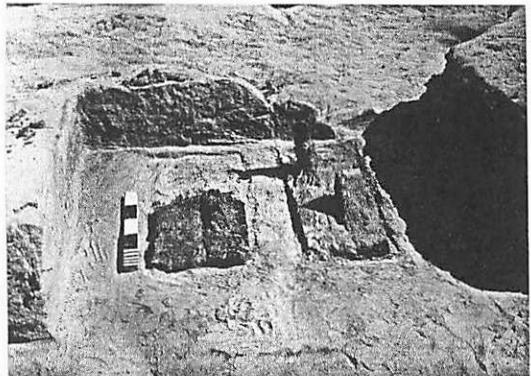
このスネフェルカに関しては、名前と共に記される語句がカアア王の銘を持つ資料に見られる語句と類似するため、カアア王が一時的に名乗ったホルス名ではないかとす



幾何学文様: 上エジプト(アビドス)のシンボル



雄牛頭部模型: 下エジプト(メンフィス)のシンボル



2体の木像: 上下エジプトそれぞれの王を示す像?

図5 3505号墓に示された上下エジプト統一の概念図

(筆者作図: ただし、雄牛頭部模型については保存状態の良好な3507号墓の例を使用。幾何学文様の出典はEmery 1958: Pl. 27)

る見方がある (Wilkinson 1999: 82)。ただし、今述べたように出土例は僅かな上、階段ピラミッド下の出土例では、セレクの中に記された彼の王名がカアア王と見られる王名を削除した上に刻まれており、エメリーも記しているように、このスネフェルカはカアア王の後に短期間在位した王、あるいは王位篡奪者と捉えた方が良いように思われる (Emery 1958: 31)<sup>13)</sup>。

またそれに関連する事柄として、第2王朝初期の王墓はアビュドスではなくサッカーラに築かれたが、その場所は数百メートル南西の異なる墓域へと移動しており、墓の形式も第1王朝の墓とは全く異なる姿を呈している。破壊により不明な点も多いものの、そこでは地上の上部構造に幾何学文様や雄牛頭部模型の痕跡は見られず、地下の下部構造も第1王朝とは異なり、放射線状に墓室が伸びるギャラリー形式を用いるのである (Barsanti 1902; Maspero 1902)。こうした第1王朝と第2王朝の間における葬祭建築面での断絶も、スネフェルカという、いわば異端の人物がこの第1王朝期墓地最末期の3505号墓に埋葬された可能性を示唆しているのではないだろうか。

あるいは、ケンブが主張したように、墓碑が発見された

高官メルカがこの墓の被葬者であったとすれば、彼は王が持ちうるような装飾を施した墓に埋葬された、非常に強い権力を有する人物だったことになる。事実、彼の石碑にはセム神官の称号があり、これは王の息子が就く官職と捉える見方も存在する (Schmitz 1984: 833-836)。だとすれば、サッカーラ唯一の墓碑を有する彼の身分の高さは、墓の装飾面においても現れていると見ることができよう。ただし、その場合には2体の木像についてそれをメルカ自身の像と捉えて良いのかどうか、疑問が残るところとなろう。

したがって、これらの分析並びに解釈の結果を総合すると、第1王朝期のサッカーラ墓地に見られる雄牛頭部の模型は下エジプトの象徴、もしくは王の象徴的存在として墓に備え付けられたもので、その模型を持ち、アビュドスの王が独占的に用いた連続菱形文を壁に描いた3505号墓は、王朝末期に王墓を意図して造られた墓であったと見ることができる。その被葬者は、資料が乏しいために断定は困難なもの、こうした模型や文様の意味から考えて、王または王に匹敵する権力を有する人物であった可能性が高い。候補としては、後世には異端と考えられたスネフェルカという王、あるいは墓碑が発見された高官メルカを挙げるこ

とができる。

また今回の検討で、3505号墓以外に王墓と目される墓は第1王朝期の墓地内に見出されなかつたが、雄牛頭部模型を持つ墓は、最初期のアハ王期に築かれた3357号墓よりも南に位置している。王朝半ばのデン王期に、この3357号墓の北に墓が造営されたことは既に述べたが、今後の研究では、本試論の妥当性を他の側面から検討するのももちろんのこと、雄牛頭部模型の出土状況が示す墓地内における北と南の違いを、はたして2つの墓域の違いとして捉えることができるかどうかに焦点を当てて考察を進めていく必要があると言えよう。

なお、続く第2王朝初代の王であるヘテプセケムイ（2つの力は治まる）という王名からは、第1王朝から第2王朝に掛けて上下エジプト間の争いが起こっていたことが推測されるほか、第2王朝の後期には、ペルイブセンとカセケムイという2人の王が再びアビュドスに王墓を築いている。サッカーラでは、第3王朝にジョセル王の巨大な階段ピラミッド複合体が建造されたことが知られており、その完成をもって中央集権制の成立を指摘する意見が見られるが（屋形 1998）、そこに至るまでの国家形成過程は当初から決して盤石なものだったのではなく、この3505号墓の存在が示すように、第1王朝の末においても、王の支配権は国内において必ずしも確立したものではなかったと見ることができるのでないだろうか。

本稿は、日本西アジア考古学会第8回大会（於：名古屋大学）での研究発表「エジプト第1王朝のサッカーラ墓地について」の中でふれた、同墓地出土の雄牛頭部模型を分析対象として、最大の墓である3505号墓の性格を論じたものである。発表会場で有益なご教示ご鞭撻を賜った会員諸氏に、この場をお借りして厚く御礼申し上げたい。

#### 註

- 1) アビュドスでは、ジェル王の墓とされる遺構から貴石できた腕輪を着けた腕の骨が出土し（Petrie 1901: 16-19, Pl. 1）、サッカーラでも、木棺の残存や被葬者の遺体と思われる人骨が出土しているが（Emery 1938: 8; 1949: 18, 98, 119; 1954: 20; 1958: 12, 45, 79）、そのような痕跡を持たない墓の方が多い。
- 2) 以前に、論者はアビュドスとサッカーラに集中して出土するシリア・パレスティナ地域製土器200点余りを集成し、その分析から王墓地をアビュドスに比定したことがあるが（中野 1996a, 1996b; Nakano 1998）、本稿では、研究対象を被葬者像について意見の分かれるサッカーラ墓地に絞っている。
- 3) エメリーは3505号墓についても300点ほどの模型が存在した可能性を示唆しているが、写真図版では少數の模型の痕跡しか見出すことができず、その正否は明らかでない。もっとも、この墓は盗掘や火災などの甚大な被害を受けている（Emery 1958: 5, 11）。
- 4) 幅や奥行はほぼ一定で、エメリーはジョセル王（第3王朝）のピラミッド複合体の周壁に類似すると述べている（Emery 1958: 6）。
- 5) エメリーの一連の報告には全て bulls' heads と記されており、本稿ではそれを尊重してこれらの角は「雄牛」のものと考えている。
- 6) もっとも、この3505号墓は模型を有する墓のうち最後に造られているため、単純に他の墓の配置例を参考にする訳にはいかないのかもしれない。ただし、エメリーは "...but sufficient remained to show that their arrangement conformed to the system of design and was similar to that found in the tomb of Uadji (No. 3504)" と述べており（Emery 1958: 6）、ある程度自信を持って3504号墓に類似した模型の配置が3505号墓でなされただろうことを推測している。写真図版では確認できないものの、それを示唆するような出土状況が、他にも見られた可能性が高い。
- 7) 封泥は土器から外れた状態で出土することが多く、この封泥もどの土器につけられていたかは不明である。なお3507号墓では、供獻跡と見られる土器の集積が東面の通路と北面の周壁外で2箇所出土しており、それらの土器型式には、3505号墓から出土したものと一致するものが多い（中野 1999）。
- 8) 南東の壁に関しては、実際の発掘によるものではなく調査者の推測である。
- 9) サッカーラ墓地では、3503号墓、3120号墓、3121号墓にも幾何学文様が描かれている。このうち、3503号墓は雄牛頭部模型を多数有する3504号墓の隣に位置し、出土した封泥からジェト王とデン王の間のメリトネイト王妃期に属すると考えられる。3120号墓と3121号墓はカニア王期に築かれたと考えられるが、連續凹壁を外観に持たず、内部に2点の壁龕を設けた墓である。なお3503号墓は建造後に多數の土器供獻を受けているが（Emery 1954: 139）、土器型式はカニア王期の3505号墓出土の土器と一致するものが多く、筆者はその際に文様も描かれた可能性があると考えている。紙面の都合上、詳細は別稿に譲りたい。
- 10) 本稿では、新たな解釈の可能性を見出すことを目的に雄牛頭部模型の追加がカニア王期になされたと積極的に捉えた上で論を進めたが、逆に、元々の墓に模型が備え付けられていた可能性も、現段階では抹消することができない。その場合には、カニア王期に3505号墓が建造された際、隣にある3504号墓を模倣して模型が設置されたことになる。そこで問題となるのは、アビュドスで確認されていない模型がなぜ王朝初期のジェト王期からサッカーラに存在したのか、あるいは20数基のうち、なぜ4基のみが他の墓にはないベンチや模型を有しているのかという点であろう。本文中に示した幾つかの状況証拠から、現時点ではカニア王期の追加を考えているが、いずれの見方が正しいにしろ、最初に建造されたアハ王期の3357号墓を境として、第1王朝期のサッカーラ墓地はベンチや模型を持つ南と、それを持たない北の2つの墓域に分かれる可能性が生じることになる。本文でもふれたように、この点はさらに検討すべき課題であろう。
- 11) この2体の木像に関しては、王の死後に制作されたと考える説もある（cf. Smith 1998: 262-15）。
- 12) スールージアンはこの2体の木像についてカニア王の可能性を挙げているが、左足前の姿勢等からの推測に過ぎず、3505号墓の被葬者像に関しては何もふれていない（Sourouzian 1995: 140）。
- 13) なお、近年エジプト考古学のハワス長官を中心とした調査隊が3507号墓の南で行った発掘では、スネフェルカの名がアラバス

ター容器片に刻まれた形で数点出土したとされる。しかし、状況はホームページ ([http://www.guardians.net/hawass/articles/new\\_discovery\\_from\\_dynasty\\_1.htm](http://www.guardians.net/hawass/articles/new_discovery_from_dynasty_1.htm)) 上で断片的に伝えられているに過ぎず、正式な報告は未刊である。

参考文献

- Ayrton, E., C. T. Currelly and A. E. P. Weigall 1904 *Abydos III*. Egypt Exploration Society 25. London.
- Barsanti, A. 1902 Fouilles autour de la pyramide d'Ounas (1902). *Annals du Service des Antiquités de l'Egypte* 3: 182-4.
- Dreyer, G. 1998 *Umm el-Qaab I. Das Prädynastische Königsgrab U-j und seine frühen Schriftzeugnisse*. Mainz, Philipp von Zabern.
- Emery, W. B. 1938 *Excavations at Saqqara: The Tomb of Hemaka*. Cairo, Government Press.
- Emery, W. B. 1939 *Excavations at Saqqara: The Tomb of Aha*. Cairo, Government Press.
- Emery, W. B. 1949 *Great Tombs of the First Dynasty*, I. Cairo, Government Press.
- Emery, W. B. 1954 *Great Tombs of the First Dynasty*, II. London, Egypt Exploration Society.
- Emery, W. B. 1958 *Great Tombs of the First Dynasty*, III. London, Egypt Exploration Society.
- Emery, W. B. 1961 *Archaic Egypt*. Harmondsworth, Penguin Books.
- Frankfort, H. 1948 *Kingship and the Gods*. Chicago and London, the University of Chicago Press.
- Green, F. and J. Quibell 1902 *Hierakonpolis II*. London, Egyptian Research Account.
- Grimal, N. 1992 *A History of Ancient Egypt*. Oxford and Cambridge, MA., Blackwell.
- Kaplony, P. 1963-64 *Die Inschriften der ägyptischen Frühzeit*. 3vols. Wiesbaden, Otto Harrassowitz.
- Kemp, B. J. 1966 Abydos and the Royal Tombs of the First Dynasty. *Journal of Egyptian Archaeology* 52: 13-22.
- Kemp, B. J. 1967 The Egyptian 1st Dynasty Royal Cemetery. *Antiquity* 41: 22-32.
- Lacau, P. and J.-P. Lauer 1959 *La Pyramide à Degrés IV. Inscriptions gravées sur les vases*. Cairo, Institut français d'Archéologie orientale.
- Maspero, M. 1902 Note sur les objets receuilles sous la pyramide d'Ounas. *Annals du Service des Antiquités de l'Egypte* 3: 185-90.
- Nakano, T. 1998 Abydos Ware and the Location of the Egyptian First Dynasty Royal Tombs. *ORIENT* 33: 1-32.
- Nakano, T. 2000 An Undiscovered Representation of Egyptian Kingship ?: The Diamond Motif on the Kings' Belts. *ORIENT* 35: 23-34.
- O'Connor, D. 1987 The Earliest Pharaohs and the University Museum. *Expedition* 29-1: 27-39.
- O'Connor, D. 1989 New Funerary Enclosures (Talbezirke) of the Early Dynastic Period at Abydos. *Journal of the American Society of Oriental Research Center in Egypt* 26: 51-86.
- O'Connor, D. 1991 Boat Graves and Pyramid Origins. New Discoveries at Abydos, Egypt. *Expedition* 33-3: 5-17.
- Petrie, F. 1901 *The Royal Tombs of the Earliest Dynasties*. London, The Egypt Exploration Fund.
- Petrie, F. and J. Quibell 1900 *Hierakonpolis I*. London, Egyptian Research Account.
- Schmitz, B. Sem. 1984 *Lexicon der Ägyptologie* (ed. by Helck, W. and E. Otto) V: 833-836. Wiesbaden, Otto Harrassowitz.
- Smith, W. (rev. by W. Simpson) 1998 *The Art and Architecture of Ancient Egypt*. New Haven and London, Yale University Press.
- Sourouzian, H. 1995 L'iconographie du roi dans la statuaire des trois premières dynasties. In R. Stadelmann and H. Sourouzian, *Kunst des Alten Reiches Symposium im Deutschen Archäologischen Institut Kairo am 29. und 30. Oktober 1991*. Deutsches Archäologisches Institut, Abteilung Kairo Sonderschrift 28. Mainz, Deutsches Archäologisches Institut, Abteilung Kairo.
- von der Way, T. 1989 Tell el-Fara'in - Buto. 1. Bericht. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 45: 275-307.
- Wilkinson, T. 1999 *Early Dynastic Egypt*. London, Routledge.
- Wilkinson, T. 2000 *Royal Annals of Ancient Egypt: The Palermo Stone and its Associated Fragments*. London, Routledge.
- Wood, W. 1987 The Archaic Stone Tombs at Helwan. *Journal of Egyptian Archaeology* 73: 59-70.
- 近藤二郎 1997『エジプトの考古学』同成社。
- 中野智章 1996a「古代エジプト第1王朝の王墓地比定に関する一試論－輸入土器からの視点－」『オリエント』第39巻1号 19-40頁。
- 中野智章 1996b「エジプト第1王朝におけるパレスティナ土器の型式編年研究」『南山大学大学院考古学研究報告』第6冊 1-48頁。
- 中野智章 1999『古代エジプト第1王朝における王墓地論－サッカラ墓地の研究を中心に－』南山大学博士学位請求論文。
- 中野智章 2003a「古代エジプトの王権研究における新視点－王像のベルトに記された王の独占文様－」屋形禎亮編『古代エジプトの歴史と社会』同成社 61-75頁。
- 中野智章 2003b「王の埋葬はエジプトの初期王権について何を物語るか」初期王権研究委員会編『古代王権の誕生 III - 中央ユーラシア・西アジア・北アフリカ編-』228-244頁 角川書店。
- 屋形禎亮 1998「11 エジプト文明の成立」大貫良夫他著『世界の歴史1 人類の起源と古代オリエント』373-417頁 中央公論社。

中野智章

南山大学

Tomoaki NAKANO

Nanzan University